

# 第1章 自由教育令から改正教育令へ

## 1 制度の変更

学制の理想は大きいものでしたが、その施行の実際は必ずしもじゅうぶんなものではありませんでした。明治10年(1877)、第2・第3大学区を巡視した西村茂樹・九鬼隆一の視察記録にも、そうした矛盾の指摘と、改善案の具申とが見られました。すなわち、西村茂樹は、

官吏ノ厳ナル説諭ニ由リテ、人民ノ就学スル者年々益<sup>ますます</sup>多シ。然<sup>しか</sup>レドモ、自分ノ方法ヲ以<sup>もつ</sup>テ教育ヲ全国ニ普及セシメントスルハ、民力ノ能<sup>よ</sup>ク堪フル所ニ非<sup>あら</sup>ザルカト思ハル。宜<sup>よろ</sup>シク其方法ヲ改メ、貧村僻<sup>へきゆう</sup>邑ノ学校ハ、教則ヲ簡ニシ、時刻ヲ短クシ、一ハ学校ノ費用ヲ減ジ、一ハ生徒ニ家事ヲ弁ズルノ時刻ヲ与フルトキハ、民心悦服シテ、教育ノ弘<sup>ぐ</sup>衍<sup>えん</sup>更ニ一層ノ広大ヲ増スベシ。と述べました。また、九鬼隆一は、

今日教育ヲ此ノ如<sup>かく</sup>キ貧<sup>ごと</sup>窶<sup>ル</sup>ノ子弟ニマデ及ボサノコトヲ欲スルニハ、必<sup>かならず</sup>先コレニ適<sup>そ</sup>シテ其<sup>その</sup>実益ヲ与フベキ授業ノ方法無カルベカラズ。又<sup>また</sup>法寛ニシテ、事簡ナル適當ノ規則ヲ設ケタル教場無カルベカラズシテ、今ハ然<sup>しか</sup>ラズ。地方ノ学事多クハ文部省三四直轄校ノ教則、校則ニ模倣セザルモノ<sup>ほとんどまれ</sup>幾<sup>けだしこの</sup>希ナリ。蓋此教則ハ要スルニ、或<sup>あるい</sup>ハ中等以上ノ産アリ、其<sup>その</sup>中等以上ノ地ニ住スル者

ノ子弟ニ施スニ近シト<sup>いえども</sup> 雖、<sup>これ</sup>此ヨリ以下ノ人民ニハ到底行フベ  
カラズシテ、<sup>いまだ</sup>未<sup>その</sup>地方ニ其教育ニ適スベキ<sup>もうけ</sup>ノ設アル所ヲ<sup>み</sup>観ザルナ  
リ。

と述べていました。

当時、初等教育がある限界まで来ていたことが、これによっても察せられるではありませんか。これ以上教育を普及するためには、就学の規則をゆるやかにし、学科課程を簡略にすることが必要だと説かれているのです。

しかし、問題はそれだけではありませんでした。当時新政府は、<sup>はぎ</sup>萩の乱・佐賀の乱について西南戦争と、かつての武士階級のあい  
つぐ反発に直面しなければなりませんでした。しかも、それらを制圧したあとには、自由民権運動という言論による反抗にむかわなければなりません。新政府は、対外的には先進諸外国の文明に追いつかねばならぬという課題をにないながら、対内的にはこれらの問題を処理して「国家興隆」へと努力することが必要でした。

明治10年代初頭の教育政策の変更は、これらの事情と関係しています。そうして、海後宗臣教授が述べておられるように、学制期に見られた開明的傾向はむしろ裏面にかくれ、徳育主義、教化主義的傾向が表面に現われてくるようになります。

明治12年(1879)政府はいわゆる自由教育令を出し、翌13年には、さらにそれを改正し、いわゆる改正教育令を出しました。この自由教育令については、米国の自由主義にならったものとされていますが、むしろそれよりは、学制の理想と就学状況その他

の現実とのへだたりがあまりに大きかったため、その歩みよりの上から出されたものと見るべきでしょう。この布告では、義務教育期間・就学年限を短縮し、学科目に整理を加えています。これらは初めに見た西村茂樹・九鬼隆一の視察報告でも述べられていたところです。

しかし、この教育令が出されると、地方では必ずしもその意図をじゅうぶん理解せず、学校建築の減少、就学率の低下という結果になって現われました。（しかし、就学率の低下といっても、後の表で見るように、男子はそうではありません。また、その数もそれほどふえてくる傾向でもなかったのですから、必ずしもそのためばかりとはいえないと思われます。）

ここにおいて、政府は改正教育令を出し、就学・学校設置・教員任免などを厳重にし、府県知事の統率下に置くことにしました。（しかし、学科課程においては、それほどの変更はありませんでした。だいたい自由教育令に定めていたものを受けついでいます。）

学科課程の細目やその程度、週時間数などについては、14年(1881)5月の「小学校教則綱領」、同年7月の「中学校教則大綱」で定められました。特に、小学校においては「修身」科が各教科の最初に置かれ、中学校では「和漢文」科が設けられたことが、前期と比べての大きな違いだといえましょう。10年ごろから盛んになってきた徳育主義、教化主義の現われと見ることができます。漢文も前期にはずいぶん排撃されていたのですが、この期になってふたたび顧みられることになりました。

なお、教科書についての検定も、しだいに整備されてきます。前期の小学教則では、普通に単行本としてあったものを教科書として指定したりしていました。しかし、文部省は13年(1880)8月には、府県に通達を発し、小学校教科書として不適当なものを通知しました。小学教則にあげられていた本で、このとき不適当とされたものもかなりあります。それらは洋学者系統の人の著作になるもので、修身・政治・生理に関するものが大部分でした。ついで、小学校教則綱領の発布に続いて、文部省は教科書を開申するよう通達しました。さらに、16年(1883)7月には、教科書は文部省の認可によらなければならないことを通達しています。開申制から認可制へと整備されてきているのです。

## 2 儒教主義の復活

これより前、明治12年(1879)元田永孚<sup>ふ</sup>は明治天皇の趣旨に基づいて「教学大旨」を草しました。ここでは、文明開化の教育が批判され、仁義忠孝を明らかにすることが国民教育にとって必要であると述べられています。

自今以往祖宗ノ訓典ニ基キ、専<sup>もつぱ</sup>ラ仁義忠孝ヲ明カニシ、道德ノ学ハ孔子ヲ主トシテ、人々誠実品行ヲ尚<sup>たつ</sup>トビ、然<sup>しか</sup>ル上各科ノ学ハ其<sup>その</sup>才器ニ随<sup>ますます</sup>テ益々長進シ、道德才芸本末全備シテ、大中至正ノ教学天下ニ布満セシメバ、我邦独立ノ精神ニ於<sup>わがくに</sup>テ、宇内ニ<sup>おい</sup>恥<sup>はず</sup>ル事無カルベシ。

このような方針に基づいて、教育令は実施されたものと考えられます。すでに見たとおり、14年には、小学校教則綱領、中学校教則大綱が出されたのですが、同年にはまた、小学校教員心得が出されました。この中では、

小学教員ノ良否ハ普通教育ノ弛張<sup>し</sup>ニ関シ、普通教育ノ弛張ハ国家ノ隆替ニ係ル。其任タル重且大ナリト謂フベシ。今夫小学教員其人ヲ得テ普通教育ノ目的ヲ達シ、人々ヲシテ身ヲ修メ、業ニ就カシムルニアラズンバ、何ニ由<sup>より</sup>テカ尊王愛国ノ志氣ヲ振起シ、風俗ヲシテ淳美<sup>じゆん</sup>ナラシメ、民生ヲシテ富厚ナラシメ、以テ国家ノ安寧福祉<sup>し</sup>ヲ増進スルヲ得ンヤ。

と述べられています。

このような点が、言語・文字の教育の上にも反映してきます。学制期では、漢字・漢文は排撃されていたのですが、それらがふたたび重んじられるようになります。小学校の中等科以上では漢文の教科書も使用され、中学校では和漢文科が設けられて、主として漢文の授業が行なわれるようになりました。作文の文章にしても、漢文を読みくだした調子の文章が普通のものとされます。

その意味では、学制期の知育主義、開明主義は一步後退しました。福沢諭吉の著書は学制期においては、教科書として多数指定されていたのですが、自由民権論との関係もあって、13年にはその「通俗国権論」「通俗民権論」などは使用を禁止されました。福沢諭吉は、このごろの事情について、以下のとおり批判しています。

近日は儒教再燃したる歟、各地にて頻りに儒書を重んじ、仁義道德論の喧しきこと数年前に異なるのみならず、数十百年前にも稀なる儒教の極端に移り、孟子の文章には放伐の論あり、多く政治に関する事項ありとて之を擯斥し、或は小学読本の嘉言善行にも必ず漢土及び本邦人の言行を録して、西洋の臭気を帯るを好まずと云ふが如きは、近時文明の火焰中に氷柱の突出したるものと云ふも可ならん。

しかし、開明主義は全く捨て去られたわけではありませんでした。教科書のところでも見られるように、そういう教材も部分的には採用されています。そして、教科書におけるこれらの両傾向のものは、次期において統一されることになるのです。

## 第2章 小学校における言語・文字の教育

### 1 小学校教則綱領

明治14年(1881)5月、「小学校教則綱領」が出されました。すでに見たように、小学校の教科目やその程度、週授業時間数などについて定めているものです。

改正教育令において、小学校は初等科(3年)・中等科(3年)・高等科(2年)の3種に分かれ、児童・生徒はこの順序に進むことになりました。そうして、言語・文字の教育に関する教科としては、「読書」科と「習字」科の二つの教科が設けられています。これ以前の学制に示されていた言語・文字の教育に関する多くの教科が整理統合されて、「読み・書き」という寺子屋の方式と同様の簡単なものに統一されたのです。

「読書」科と「習字」科との二つの教科は、前期の師範学校教則の展開として考えられます。寺子屋の教科と似ているとはいっても、寺子屋では実教科に関するものも学習するようになっていました。そして、師範学校教則、その他これにならった各府県の教則では、それらの実教科は「読法(書)」科と「問答」科との両科で行なわれていました。そのうち、地理・歴史などの実教科は「問答」科を通して独立の教科となっていき、あとの「読法」科のほうには、「読本」が残されることになりました。つまり、「読本」

が「読法」科の主体をなすようになったのです。

ですから、この期の「読書」科においては、そういう実教科に関するものは、その初歩的なものは別として、一応除外されています。制度の上において、こうした規定を行なっているのが、つまり、小学校教則綱領にほかなりません。江戸期に比べると、より狭義のものとして、「読書」科が設けられているわけです。

小学校教則綱領で定めているところは、次のとおりです。すなわち、「読書」科を「読方」と「作文」に分けていますが、「読方」については、

初等科ノ読方ハ、伊呂波、五十音、濁音、次清音、仮名ノ単語、短句等ヨリ始メテ、仮名交リ文ノ読本ニ入り、兼テ読本中緊要ノ字句ヲ書取ラシメ、<sup>つまびらか</sup> 詳ニ<sup>これ</sup>之ヲ理會セシムルコトヲ務ムベシ。中等科ニ<sup>おい</sup>於テハ、近易ノ漢文若クハ<sup>もし</sup>稍高尚ノ<sup>やや</sup>仮名交リ文ノ読本ヲ授ケ、高等科ニ至テハ、漢文ノ読本若クハ高尚ノ<sup>しやう</sup>仮名交リ文ノ読本ヲ授クベシ。

凡<sup>およそ</sup>読本ハ文体雅馴<sup>じゆん</sup>ニシテ、學術上ノ益アル記事、或ハ生徒ノ<sup>あるい</sup>心意ヲ<sup>よろこ</sup>愉バシムベキ文詞ヲ包有スルモノヲ<sup>せん</sup>撰用スベク、之ヲ授クルニ当テハ、読法、字義、句意、章意、句ノ變化等ヲ理會セシムルコトヲ旨トスベシ。(第11条)

と述べています。読本が主体をなすものであることは明らかですが、しかし、その具体的な内容については、それほど明らかでもありません。ただ、述べられているのは、いろは、五十音から始めて、かなの単語・短句にはいるという入門段階についてであり、



それ以上は「読本」に進むとなっています。しかも、その読本の性格については、「文体雅馴ニシテ、學術上ノ益アル記事、或ハ生徒ノ心意ヲ愉バシムベキ文詞ヲ包有スルモノ」と規定しているだけです。これでは、言語学習に重点を置いているのか、それとも思想教育を意図しているのか、あるいは文学教育をねらっているのかなどといったことは、必ずしも明確ではありません。

このため、読本には各種の傾向のものが生じてきます。歴史・地理・博物等の実教科に関する初歩的な文章、教訓的な文章などが読本中多数採用されるということになります。（この傾向は、こののち昭和に至るまで受けつがれ、歴史的教材・地理的教材などと呼ばれます。）

次に、教則綱領は、作文については、以下のとおり述べています。

初等科ノ作文ハ、近易ノ庶物ニ就<sup>つき</sup>テ其<sup>その</sup>性質等ヲ理解セシメ、  
之<sup>これ</sup>ヲ題トシ、仮名ニテ単語、短句等ヲ綴<sup>つづ</sup>ラシムルヲ初<sup>やや</sup>トシ、稍  
進テハ近易ノ漢字ヲ交ヘ、次に簡短ノ仮名交リ文ヲ作ラシメ、  
兼テ口上書類ヨリ日用書類ニ及ブベシ。中等科及高等科ニ於<sup>おい</sup>テ  
ハ、日用書類ヲ作ラシムルノ外、既<sup>すで</sup>ニ学習セシ所ノ事実ニ就テ  
志伝等ヲ作ラシムベシ。（第11条）

ここでは、事物の性質を理解させ、その定義文、説明文ともいうべきものを作らせることについて述べ、一方では、また日用書類を作らせることについても述べています。このような傾向は、すでに学制期の教科書にも見られたところでしたが、それが規則

の上で明確にされ、順序づけられているのです。ただ、ここにある課題文と実用文との二つの目的は、この後の作文教育における二つの流れとして、これ以後たえず表裏して現われてくることになります。

「習字」科の規定は、以下のとおりです。

初等科ノ習字ハ、平仮名、片仮名ヨリ始メ、行書、草書ヲ習ハシメ、<sup>その</sup>其手本ハ数字、十干、十二支、<sup>みよう</sup>苗字、著名ノ地名、日用庶物ノ名称、口上書類、日用書類等、民間日用ノ文字ヲ以テ<sup>これ</sup>之ニ充ツベシ。中等科及高等科に至テハ行書、草書ノ外、<sup>かい</sup>楷書ヲ習ハシムベシ。（第 12 条）

この規定は、学制期の習字の内容、というよりも寺子屋以来の「手習」の内容と、それほど差はありません。数字・十干・十二支・苗字・地名などから始まり、日用書類に及ぶことに定められていて、寺子屋で学習した内容とほぼ同様です。

ただ、学制期と比べて異なっているのは、行書・草書に重点を置いていることです。小学教則では、<sup>かい</sup>楷書から始めるように定めていましたが、それはこのように改められています。日常の用にあてるという立場から、こう改正されたものです。

なお、次のページに示してあるのは、授業時間数の表です。小学校教則綱領に例示されている表によって、言語・文字の教育に関係のある各教科の授業時間数と、全教科の合計授業時間数とを示しました。

（各欄の上段は毎週時数、下段は毎週度数を示しています。た

例えば、 $\frac{6}{3}$ は毎週時数が6で、毎週度数が3です。なお、女子は、中等科では作文・習字が各1時間ずつ、高等科では習字が1時間少なくなっています。「裁縫」にあてゐるためです。)

学 科 年		初 等 科						中 等 科	
		1 年		2 年		3 年		4 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
読 書	読 方	6/6	6/9	6/9	6/9	6/9	6/9	5/5	5/5
	作 文	6/3	5/5	5/5	5/5	5/5	5/5	3/3	3/3
習 字		5/5	5/5	5/5	5/5	5/5	5/5	4/4	4/4
(小 計)		17/14	16/19	16/19	16/19	16/19	16/19	12/12	12/12
全授業 時数/度数		29/23	28/28	28/28	28/28	28/28	28/28	34/28	34/28
学 科 年		中 等 科		高 等 科					
		5 年		6 年		7 年		8 年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
読 書	読 方	5/5	5/5	5/5	5/5	6/6	6/6	6/6	6/6
	作 文	3/3	3/3	3/3	3/3	3/3	3/3	3/3	3/3
習 字		4/4	4/4	3/3	3/3	2/2	2/2	2/2	2/2
(小 計)		12/12	12/12	11/11	11/11	11/11	11/11	11/11	11/11
全授業 時数/度数		34/28	34/28	34/28	34/28	28/28	28/28	28/28	28/28

## 2 就 学 状 況

当時の小学校の就学状況は、次の表のとおりです。学制期は、

### 小 学 校

		明 治 12 年	明 治 13 年	明 治 14 年
生 徒	男	1,717,422	1,762,113	1,875,576
	女	597,648	586,746	731,601
	計	2,315,070	2,348,859	2,607,177
学 齡 人 員	男	2,799,764	2,878,508	2,914,727
	女	2,571,619	2,654,688	2,700,280
	計	5,371,383	5,533,196	5,615,007
学 齡 就 学	男	1,629,701	1,690,277	1,747,451
	女	580,906	581,573	666,135
	計	2,210,607	2,271,850	2,413,586
就 学 率	男	58.21%	58.72%	59.95%
	女	22.20%	21.91%	24.67%
	計	41.16%	41.06%	42.98%
学 就 齡 外 学	男	150,281	124,190	—
	女	40,083	31,743	—
	計	190,364	155,933	97,503

(就学率=学齡就学者数/学齡人員)

だいたい30%から40%ぐらいまで進んでいたのですが、この期では、40%ぐらいから50%ぐらいに進んでいます。やはり、女子のほうがずっと低いのですが、この期の終わりでは、ようやく30%を越えるようになっていきます。

しかし、この期としては、これが限度であったのかもしれませんが。男女合わせての就学率が60%を越えるのは、明治27年(1894)のことです。学校の意義が理解され、その負担に応じられるようになるためには、まだあと10何年かたたなければならなかったのです。

明治15年	明治16年	明治17年	明治18年
2,084,624 919,513 3,004,137	2,216,358 1,021,149 3,237,507	2,219,375 1,013,851 3,233,226	2,154,449 942,786 3,097,235
2,994,744 2,756,202 5,750,946	3,087,781 2,864,219 5,952,000	3,199,684 2,964,506 6,164,190	3,336,903 3,076,781 6,413,684
1,936,019 853,757 2,789,776	2,073,648 963,622 3,037,270	2,142,267 986,806 3,129,073	2,195,617 986,615 3,182,232
64.65% 30.98% 48.51%	67.16% 33.64% 51.03%	66.95% 33.29% 50.76%	65.80% 32.07% 49.62%
179,055 48,623 227,678	195,337 51,470 246,807	— — —	— — —

就学していた児童にしても、その在学年限は短いものでした。仲新氏が「近代教科の成立」で示された「年級別在籍歩合表」(10府県から20府県くらいまでの数から算出)を借用しますと、次表のとおりです。明治14年の例でみますと、最初の1年間だけ

年 次	8 年	9 年	10年	11年	12年	14年
上 等 小 学	0.1	0.5	0.	1.2	2.2	4.7
下等小学一級	0.1	0.6	1.3	1.4	2.0	3.2
二 級	0.4	1.0	1.8	2.2	2.8	4.3
三 級	0.9	2.2	3.2	4.0	4.5	5.7
四 級	0.8	4.2	5.1	6.1	6.7	7.8
五 級	0.0	7.0	8.2	9.0	9.5	9.7
六 級	9.8	11.2	11.8	12.9	12.7	12.4
七 級	16.7	19.6	18.9	19.3	18.5	17.8
八 級	65.2	53.7	48.9	43.9	41.2	34.4

学している者が50%ぐらい、次の1年間が20%ぐらいですから、1年か、せいぜい2年間の在学というのが、大部分であったことがわかります。（学制期の最初のころには、武士階級の子弟たちは、あまり小学校へは行かなかったといわれていますが、このころでは、もうそれほどでもなくなっていると思われます。）ですから、言語・文字の教育にしても、相当限られた人たちを対象に行なわれていたものであるといえます。

### 3 心性開発主義の風潮

1の「小学校教則綱領」の項で見たとおり、段階的に順序を追った教授については、規定に明示されていました。

学制当時の教授方法は、これと違って暗唱を主とするものでした。ある単語や文章の意味を理解するというよりは、むしろ、そ

れらを暗記することのほうに重点が置かれていたかたむきがあります。また、教材の配列についても児童・生徒の発達段階については、それほど考慮されないで実施されていました。江戸期のものに比べると、まだやさしくなっていたのかもしれませんが、一般の人々を対象として教授する場合には、このような点が反省されないではいられませんでした。

すでに見た九鬼隆一の第3大学区視察記録の中には、暗唱の方法について、

諳誦<sup>あんしょう</sup>ハ記憶部ヲ富マシムル者ニシテ、地理算数等ニ至リテハ、  
殊ニ至要ノ業タリト<sup>こと</sup> 雖、其時間<sup>いえどもその</sup>と脳力<sup>もう</sup>トヲ消耗スルコト多ケレバ、  
生計ニ顧慮セザルベカラザル貧民子弟ニハ、其益ヲ得ルノ  
効ヲ見ズシテ、却<sup>かえつ</sup>テ身心ヲ害スルニ至ラン。

と、述べられていました。西村茂樹の第2大学区視察記録においても、同様です。それは「単語問答<sup>コトバ</sup>」についてのものですが、ここでは、

下等小学第八級ノ生徒ノ学ブ所ニシテ、文部省製ノ単語図ヲ  
掲ゲテ、一々<sup>その</sup>其性質功用ヲ教ヘ、教師<sup>これ</sup>之ヲ問ヒテ、生徒ヲシテ  
之ニ答ヘシム。八級ノ生徒<sup>ただ</sup>唯教師ノ口真似<sup>まね</sup>ヲスルノミニテ、心  
ニ会得スル所ナシ。是<sup>これ</sup>ヲ学ブニ半年ノ日月ヲ費シ、八級ヲ<sup>おわ</sup>畢リ  
テ七級ニ進ミ、移リテ他ノ科目ヲ学ブニ至レバ、単語ノ問答ハ  
全ク忘却スル者、十ノ七八ニ居ル。

と述べられていました。ともに、暗記のための暗記に終わっている実情が指摘され、改めるようにとの意見が提出されています。

開明化を意図した当時の情勢のもとでは、暗記中心の注入的方法はすでに実情に即しない教授法となっていたのでした。より効果的な方法が必要とされているのです。

このため、「実物示教」ということが、当時説かれています。たとえば、西村茂樹は、「単語問答」の改正案として、

単語図ニ代ルニ<sup>オブゼクトレツソン</sup>実物示教ヲ以テスベシ。是ハ<sup>これ</sup>図ヲ用ヒズシテ、実物ヲ用ヒ、生徒ノ力ニ応ジテ易ヨリ難ニ進ミ、六七級ヨリ初メテ二三級ニ至ルベシ。

という意見を提出していました。実物示教という考えは、すでに明治6年の「教導説」にも紹介されていたものでした。それが顧みられていることは、ようやく実物教育を説き、易より難へと説く、この期の心性開発主義を迎えるだけの風潮ができていたことを示しているものです。

心性開発主義は、児童の心理を重視し、その立場に立って教育を行なおうとするものです。この主義は、明治10年代になって、東京師範学校教授の高嶺秀夫によって紹介され、また、その指導を受けた同校助教諭の若林虎三郎・白井毅<sup>とら</sup>などの人々によって広められました。高嶺<sup>みね</sup>秀夫は、米国に留学し、ペスタロッチ運動の中心地であったオスウェーゴ師範学校に学んだ人です。帰朝後は東京師範学校の教授として、心性開発主義の理論を紹介し、その普及につとめました。明治18年(1885)にジョホノットJohonnotの著書 Principles and Practice of Teaching を「教育新論」と題して翻訳出版しました。心性開発主義の理論について述べて



いる書物です。また、これより前、明治16年(1883)には、かれの指導を受けた若林虎三郎・白井毅が、Sheldon の Elementary Instruction を翻案して「改正教授術」と題して出版しました。この書は、同主義の実際指導上の参考書として、当時の人々に広く読まれました。

「改正教授術」には、「教授ノ主義」として、以下の各項があげられています。

- 一 活潑<sup>ばつ</sup>ハ児童ノ天性ナリ。動作ニ慣レシメヨ。手ヲ習練セシメヨ。
- 二 自然ノ順序ニ従ヒテ諸心力ヲ開発スベシ。最初心ヲ作り後之<sup>これ</sup>ニ給セヨ。
- 三 五官ヨリ始メヨ。児童ノ発見シ得ル所ノモノハ決シテ之ヲ説明スベカラズ。
- 四 諸教科ハ其<sup>そ</sup>ノ元基ヨリ教フベシ。一時一事。
- 五 一步一步ニ進メ。全ク貫通スベシ。授業ノ目的ハ教師ノ教ヘ能<sup>あた</sup>フ所ノモノニアラズ。生徒ノ学ビ能フ所ノモノナリ。
- 六 直接ナルト間接ナルトヲ問ハズ、各課必ズ要点ナカルベカラズ。
- 七 觀念ヲ先ニシ、表出<sup>あと</sup>ヲ後ニスベシ。
- 八 已知<sup>い</sup>ヨリ未知ニ進メ。一物ヨリ一般ニ及べ。有形ヨリ無形ニ進メ。易ヨリ難ニ及べ。近ヨリ本ニ及べ。簡ヨリ繁ニ進メ。
- 九 先<sup>ま</sup>ヅ総合シ、後分離スベシ。

この九つの条項が、心性開発主義の要約として、当時の教育界に大きい影響を与えました。教育の主体は、それ以前と比べて、ここに被教育者のほうに置かれることになりました。主体が転換されるに至ったのです。

では、言語・文字の教育について、この主義は、どういうことを説いているのでしょうか。「改正教授術」は、読方課について、次のとおり述べます。

読方課ハ<sup>す</sup>総ベテ文学的教育ノ基礎、普通学諸課中<sup>もつとも</sup>最緊要ナルモノニシテ、教師ノ最重ンズベキ所ノモノナリ。該課ヲ教授スル進程モ<sup>また</sup>亦、観念ヲ先ニシ、表出ヲ<sup>あと</sup>後ニスルノ主義ニ従ヒ、生徒ノ平生談話シテ熟知スル所ノ事物ヲ書記セル符号、<sup>すなわ</sup>即チ文字ヲ<sup>もつ</sup>以テ認識セシムルヲ以テ目的トスベシ。

そして、「い」を教えるときの例では、まず糸を持っていて、児童に見せ、それを理解させてから「い」という字の読み方・書き方を教えます。その字を児童にも書かせてから、今度は「いぬ」、「いし」、「いたち」のように、「い」のつくものをあげさせるといったことが示されているのです。

## 4 教科書

前期の小学教則においては、当時刊行されていた単行本が、教科書として多くあげられていました。後には、「小学入門」、「小学読本」などが整備されてきたのですが、まだじゅうぶん徹底した

ものではありませんでした。

この期では、そういう点が整備されてきました。特に教科書として編集されたものが多く用いられるようになったのです。「読本」だけについてですが、小学校教則綱領では、すでに見たとおり、

凡<sup>およそ</sup>読本ハ文体雅馴<sup>じゆん</sup>ニシテ學術上ノ益アル<sup>あるい</sup>記事或ハ生徒ノ心意ヲ愉<sup>よろこ</sup>バシムベキ文詞ヲ包有<sup>せん</sup>スルモノヲ撰用スベク

と規定していました。教科書として適当なものということが、顧慮されていたわけです。

その場合、具体的な内容の特色としては、児童の能力が考慮され、教材の配列に注意が払われるようになったということがあげられます。この点については、明治10年(1877)、第3大学区を巡視した九鬼隆一も、すでにその視察報告書の中で指摘していたところでした。

願<sup>おも</sup>フニ現今普通ノ教科書中、其<sup>その</sup>順序大ニ宜<sup>よろ</sup>シキヲ得ザル者アルニ似タリ。仮令<sup>たとえ</sup>子女学ニ就<sup>つ</sup>クノ始首トシテ学ブベキ単語連語ノ掲図中ニモ亦<sup>また</sup>難渋ノ文字ヲ書シテ容易ニ解シ難キモノアリ。其次ニ学ブ所ノ読本ニ至リテハ却テ読ミ易ク<sup>かえつ</sup>、又解シ易シ<sup>やす</sup>。既<sup>また</sup>ニシテ其次ニ学ブ所ノ地理書ニ及ベバ稍解シ難キ所アリテ、次ニ学ブ所ノ博物学ハ又解シ易シ。……

凡<sup>すべ</sup>テ学問ハ易ヨリ難ニ入ルノ順序ヲ要スベキニ、今ハ則然<sup>すなわちしか</sup>ラズ。丁度道ヲ行ク者、凸凹崎嶇<sup>とつおう きく</sup>タル山径ヲ跋涉<sup>ばつしょう</sup>スルガ如シ。是<sup>ごと</sup>。是<sup>これ</sup>畢<sup>ひつきよう</sup>竟<sup>もつぱ</sup>編集ノ業ニ専ラ主宰タルモノアリテ、子女共初四五歳ヨリ

十四五歳ニ至ルマデ、其発達ノ理ヲ<sup>つまびらか</sup>審ニシ、頭尾ヲ合せ、順序ヲ<sup>おい</sup>追テ各科ノ教科書ヲ編集セシムルノ設ケ、時ニ変革アリテ永續セザルニ（明治四年以来主管者ノ変換<sup>ごと</sup>毎ニ順序更迭ス）因ルナリ。故ニ<sup>ゆえ</sup>編集ノ主管タルモノ、子女ノ身体才智性行ノ素性ヲ審ニシ、生理学心理学ニヨリテ、心身発達ノ理ニ随ヒ、教科書編集ノ順序ヲ立テ、頭尾ヲ合スルコト始終一手ニ出テ、変換ナキコトヲ要スルナリ。

以上のようにです。すなわち、教科書間の一貫性を強く主張し、易から難へ進むことの必要を熱心に説いています。

小学校教則綱領の中で、読方にしても、作文にしても、進むべき順序が細かに規定されていることは、すでに見たところです。そしてこれはまた、心性開発主義とも応ずるものでした。児童の発達段階に即している教科書、それはこの期から始まります。

次に、内容上の特色としては、伝統的傾向が強くなってきたということです。これは、学制期の読本にも部分的に示されていたことですが、しかし、それはむしろ開明的傾向の裏面にかくれていたものでした。それが、学制当時の開化的傾向に対する反省として、表面に現われてくるようになります。すでに見たとおり、福沢諭吉の著作などは、教科書としての検定には不合格になります。小学校校則綱領で「修身」科の細目が定められたりしていることにも、こうした傾向をうかがうことができますが、「読書」科においても同様です。規定中に「高尚ノ<sup>しょう</sup>仮名交り文」とありましたが、これに従って出された教科書の例文から判断すると、これは漢文

の読みくだし文や江戸期以前の和文と理解されていたことがわかります。学制期では漢字・漢文は大いに排斥されたものでしたが、この期ではそうでもなくなっています。そして、口語体の文章などは、学制期ではいくらか提出されていたにもかかわらず、この期では減少しています。後のいわゆる普通文（文語体）の基礎は、このとき定められたといってもいいのです。

## （１） 読 方

学制期の読本には、すでにくりかえしているとおり、２種の傾向が認められました。すなわち、一つは洋学者によって編され、開明的傾向を示していた「小学 読本」、一つは国学者によって編され、伝統的傾向を示していた「小学 読本」です。この二つの傾向は、この期においても、同じように認めることができます。そして、さらにその二つの傾向を折衷統一しようとするものも生じてきています。（こうして、次の期の文部省の「尋常小学読本」において、この二つの傾向は統一されるに至るのです。）

〔入門書〕 まず、入門書から見ていきます。このころの入門書は、だいたい読本に付属していて、その首巻ともいうべきものになっていました。しかし、中にはそれだけで独立しているものもありますので、ここでは、その独立しているものについてだけ見ることにします。これらは、いずれも小学校教則綱領に「伊呂波、五十音、濁音、次清音、仮名、単語、短句ヨリ始メテ」と規定しているのに応ずる内容のものです。どれも、かなから始めていま

す。

文	部	省	「小学指教図」	(明 12)
つじ				
辻			「初学読本」	(明 14)
小	池	民		
ぎぬ	がさ	ひろし		
衣	笠	弘	「初学入門」	(明 14)
小	林	常		
赤	松	完	「小学初学入門」	(明 15)
		爾		
文	部	省	「読方入門」	(明 17)

これらが当時の入門書としてあげられます。どれも、いろは・五十音から単語に進み、単語から句へ、句から文へ進んでいるという順序には変わりありません。

「小学入門」の連語図や、福沢諭吉の「文字<sup>の</sup>之教」がこういう形式のものであったことは、すでに見ました。この期では、そういう傾向をより明確に受けつぎ、それが入門書として主流をなすようになっているのです。かりに「単語主義」というなら、それはこの期から始まるものでしょう。

ところで、文部省の「小学指教図」は、小学校教則綱領が出されるより前のものですが、ちょうどこの期にはいる直前のものですから、ここにあげておきました。これは、「ひらがないろは・カタカナ五十音・同濁音・同次清音(半濁音)・数字」をまず最初にあげ、ついでさし絵とともに以下のような単語をあげています。

いぬ はし ほん へちま をけ かに そば つゑ なべ  
むぎ うづら おもと くわゐ やたて ふね えび (第4)  
あち さる きのこ ゆず めじろ ひよどり せみ  
すだれ びは くは うちは たひ こひ たらひ いへ

はへ (第5)

そして、第6図には、拗促音・長母音を含む単語があげられています。おそらく、かなづかいを問題にしているものでしょう。

(このあと、加算・乗算九九などの図があります。)衣笠弘・小林常男「初学入門」、赤松完爾「<sup>小学</sup>初学入門」も、これにかなの短句が加えられているもので、ほぼ同様のものです。

辻敬之・小池民次「<sup>初学</sup>読本」は、学制期の単語・会話・連語等を、それぞれ一つの部門として立てているものです。「いろは・五十音・濁音・かな単語・会話・連語・修身談・十干・十二支・名頭尽・<sup>みよう</sup>苗字尽・日本国尽・九九・図形」という順序であげていますが、しかし、特色のあるのは、「会話」と「連語」を区別して示しているということです。

私は、もう、おき ませう○まだ 早う ござり ます○も  
はや、おきる じぶん で、あり ます○いそいで、おおき  
なされ○あなた は、いつも、何時に、おおき 成さる か  
(会話第五)

進む こと はやき もの は、しりぞく こと も また  
はやし○善人 は うらみ を 忘れ、あくにん は 恩 を  
忘る○内 そ の 心 を たゞしく し、外 そ の おこ  
なひ を をさむ (連語第二)

ここに対照して示したように、「会話」のほうでは話しことば、「連語」のほうでは書きことば(文語文)が、使い分けられています。学制期では、古川正雄「ちゑのいとぐち」、その他「会

話」科の教科書など、話しことばをあげてあるものもかなり見られましたが、この期ではそれが減少しています。それがふたたび現われてくるのは、明治19年(1886)の小学校令以後の教科書においてです。しかも、そのときは、会話というよりは、口語文体の文章といった意味のものになっています。ここにあげた「初学読本」の文章は、その中間の様相を示している少ない例の一つです。

しかし、入門書として最も特色のあるのは、文部省の「読方入門」でしょう。これはすべてかなだけでしるされていて、漢字は用いられていません。たとえば、次のとおりです。

いね、わた、ほ、はな、まつ、たけ、き、えだ。

いね の ほ、わた の はな。まつ の き、たけ の  
えだ。(第一課)

たいこ、いくさ、らつぱ、とき、たいはう、うつは。

ぽんぷ、くわじ、はしご、ふせぐ、とびぐち、だうぐ。

たいこ、らつぱ、たいはう は、いくさ の とき の う  
つは なり。

ぽんぷ、はしご、とびぐち は、くわじ を ふせぐ だう  
ぐ なり。(第十六課)

この書は、初めに「教師<sup>しゆ</sup>須知六則」という項を設け、その中で「其<sup>その</sup>教方<sup>ていふ</sup>懇<sup>いたすら</sup>到<sup>いたすら</sup>叮嚀<sup>かえつ</sup>ヲ旨トシ。徒ニ多数ノ文字ヲ授ケ。却テ復読温習ヲ怠<sup>こと</sup>ラシムルガ如<sup>べ</sup>キ事アル可カラズ。」と述べています。また、1日平均4字を教えるようにと説き、さらに、単語や句について



は、

単語、単句ヲ授クルニハ。先ヅ各課ノ前ニ掲記セル単語ヲ授ケテ。十分<sup>これ</sup>之ニ熟セシメ。然ル後其<sup>しか</sup>単語ヨリ成レル<sup>その</sup>短句ヲ授ケテ。其句意。章意ヲ了解セシムルヲ善シトス。

と述べています。段階的な教授について、どれほど留意しているか、うかがうことができるものです。

ところで、この期の入門書に示されているかな優先の傾向は、以後の文字教育の方向を規定したものです。もちろん、学制期においても、かなを重視しようとする態度もないではありませんでした。古川正雄の「絵入<sup>ちえ</sup>智慧<sup>わ</sup>の環」や「ちゑのいとぐち」などは、かなを特に使用しようとしてつとめている本です。そのほか、当時の洋学者たち一般に通じて、かな論者、ローマ字論者の別はありますが、漢字を排斥する見解が認められました。しかし、それらの見解は、当時の教科書に全面的には受け入れられず、むしろ漢字を提出するほうが、普通の状態でした。しかし、この期になって、入門書においてではありますが、その傾向は改められ、かなから始められることになっています。このかな優先の態度は、次の期の「読書入門」にも受けつがれ、さらにはかなの中でもカタカナ優先となります。（この期では、まだ、ひらがな・カタカナの学習については、順序がつけられていません。「読書入門」においてカタカナ先習となります。）

このように、入門書にかなを用いたため、前期と異なった特徴は、「文字よりも言語に重点を置くようになった」ことだと、井

上<sup>たけし</sup>赴氏は「小学読本編纂<sup>さん</sup>史」（岩波講座国語教育・昭 12）の中で述べておられます。前期の「単語<sup>へん</sup>篇」などは漢字を主とするものであったため、むしろ「単字篇」ともいうべきものでした。学制期では、

ことば  
単語——漢字単語（主として名詞・語幹等）

かなづかい  
綴字——かなの単語のつづり（歴史的かなづかい）

として、外国語学習の教科を受け入れていました。そのため、矛盾が生じていたわけです。この期になって、それが一つにまとめられ、名詞だけでなく、その他の単語もあげられることになりました。

### 【初 等 科】

初等科の「読方」について、小学校教則綱領は次のとおり言っています。

初等科ノ読方ハ伊呂波<sup>いろは</sup>、五十音、濁音、次清音、仮名ノ単語、短句等ヨリ始メテ、仮名交リ文読本ニ入り、兼テ読本中緊要ノ字句ヲ書取ラシメ、<sup>つまびらか</sup> 詳<sup>これ</sup>ニ之ヲ理會セシムルコトヲ務ムベシ。

初等科の修業年限は3年です。最初の「伊呂波、五十音、……」については、入門書のところで見てきました。そして、「仮名交り文」では、「文体雅馴<sup>じゆん</sup>ニシテ學術上ノ益アル<sup>あるい</sup>記事或ハ生徒ノ心意<sup>よろこ</sup>ヲ愉バシムベキ文詞ヲ包有スルモノ」が、初等科の読本として要求されているのです。

中 島 有 操 「小 学 読 本」（明 14・15 7 冊）  
伊 藤 有 隣

金 港 堂 「小 学 読 本」（明 15 6 冊）

原 <sup>りょう</sup> 亮 策 「小学読本初等科」 (明 15 6 冊)

若 林 <sup>とら</sup> 虎 三 郎 「小 学 読 本」 (明 17 5 冊)

稲 <sup>がき</sup> 垣 <sup>かい</sup> 千 穎 「新 編 読 本」 (明 18 5 冊)

普 及 舎 「校 訂 読 本」 (明 18 6 冊)

これらが、この期のおもな教科書です。

ここには、開明主義的傾向のものと、伝統的傾向のものの二つの大きな流れを見ることができます。学制期にすでに見られた二つの傾向の発展というべきもので、前者を代表するものは若林虎三郎「小学読本」、後者を代表するものは稲垣千穎「新編読本」です。

若林虎三郎「小学読本」は、心性開発主義に基づいている教科書です。かれが明治 16 年 (1883) に白井毅<sup>たけし</sup>とともに「改正教授術」を刊行していることは、前に見ました。この読本は、そこに述べられた主義に従って編集されているものです。巻 1 の巻頭にある「教師<sup>しゅ</sup>須知」には、

此<sup>こ</sup>ノ書ハ 徒<sup>いたすら</sup>ニ童生ヲシテ講読セシムルヲ以<sup>もつ</sup>テ足<sup>もつ</sup>レリトセズ。実物<sup>あるい</sup>或ハ図画ニヨリテ觀念ヲ開発シテ、後<sup>これ</sup>之ヲ表出スベキ文字ヲ与<sup>あた</sup>へ、且<sup>かつ</sup>其ノ綴<sup>つづ</sup>リ方ヲ理解セシメソコトヲ要ス。斯ノ如クシテ、文字ト綴<sup>つづ</sup>リ方トヲ童生ノ記性ニ正ク積重シテ、恰<sup>あたか</sup>モ童生ノ無<sup>すなわ</sup>尽ノ所有物 (即チ要用ノ時ハ何時ニテモ自由ニ使用シ得ベキ物ニシテ、且<sup>かつ</sup>幾回使用スルモ決シテ消費セザルモノ) ト為サシムル様教導スルコトヲ務ムベシ。

と述べられています。この書は、ここに述べているように、各課

にさし絵があり、それと並んで文字を提出しています。たとえば、第1課には子どものさし絵があり、「子」（大字や小字で出される）、「此<sup>こ</sup>の子」、「其<sup>そ</sup>ノ子」、第2課には本のさし絵があり、「本」（上と同じ）、「此ノ本」、「其の本」となっています。こうして、第3課では、

見ル 持てり 見る 持テリ 見ル

此ノ子ハ本ヲ見ル

其の子は本を持てり

となります。文中、ある単語のところにその物の絵が示されていたり、欠字になっていたりして、それを補うような形式も採られています。

巻数が進むにつれて、簡単な実科的教材が増してきています。その提出のしかたは、児童の対話になっていたり、児童を主人公としたりしているものです。なるべく児童の生活に近づけようとしている点は、後に見る稲垣千<sup>かい</sup>顓「新編読本」などとは違うものです。巻三の終わりごろから故事・逸話も相当出てきますが、これに合わせて手紙文も多くなっています。文字もただ楷書<sup>かい</sup>だけではなく、行書・草書によって多くしるされ、実用に重点を置いていることがうかがわれます。

ところで、これに対し、従来の国学者の語法上の考え、文章などをとり入れているものが稲垣千顓「新編読本」です。この書の巻一は、

第一 形 状 言

たかき山。ひくき谷。ひろき海。せばき川。ふとき木。ほそき枝。あかき花。あをき葉。

## 第二 同

墨くろし。紙しろし。<sup>すすり</sup>硯おもし。筆かろし。机おほきし。木ちひさし。糸ながし。針みじかし。

## 第三 作 用 言

なく虫。はふ<sup>へび</sup>蛇。まふ<sup>ちよう</sup>蝶。とぶ鳥。はしる<sup>ねすみ</sup>鼠。ねむる<sup>ねこ</sup>猫。くる馬。かへる牛。ほゆる犬。あゆむ人。

## 第四 同

月いる。日いづ。空くもる。風ふく。

## 第五 の

木の枝。草の葉。梅の花。桃のみ。庭のうち。門のそと。…  
……。

という順序で始まっています。国学者流の品詞分類に基づき、それらの語の機能を示すところから始められているものです。「単語・短句」というものが国学者的立場から受けとられているものです。井上<sup>たけし</sup>赴氏は前掲書で、この書について、

全く我<sup>わ</sup>が国文法に随って展開する編纂<sup>さん</sup>であって、学制当時流行した「連語」「会話」が唯<sup>ただ</sup>雑然と並列されてゐたばかりか、それが動<sup>や</sup>もすれば国文法を無視し、国語を乱す体のものであったのに対し、教育令当時から抬頭<sup>たい</sup>して来た国粹的国家的精神に基づいての編纂であることが明らかに看取される。

と述べられました。

なお、この書は巻が進むにつれて、実科的内容のもの、記事文、教訓などがあげられていますが、文章自体はこの読本のほうが、前の若林虎三郎とらのものよりも格調が高いように思われます。ただし、児童の生活に直結しているという点では若林編のものに劣ります。また、教訓的文章の多いのも目につくところです。巻四・巻五はほとんどが和漢の古今の逸話で、ほかには、「養生の話」「地球の話」(巻四)、「地球の運動」「五大洲及び人種の話」「蜜蜂はちの話」(巻五)といったものも、中にいくらかあげられています。特に歴史的なことがらに重点を置いていることが、国家的伝統的傾向と考えられるところでしょう。

この後に出た普及舎の「校訂読本」は、稲垣千顥かいの関になるものですが、かなり平易になっています。教材の点からは、それほど違った特色があるというものではありませんが、しかし、さし絵は一部三、四色の色ずりで、文章の初めは大きい文字でしるされているといった新しい試みが見られます。

すでに見たとおり、小学校教則綱領は、初歩的文字学習の段階、読解上の注意などについて述べてはいましたが、その内容についてはそれほど明らかでもありませんでした。「文体雅馴じゆんニシテ學術上益アル記事」と述べているだけでした。ですから、この場合、読本の模範になったものは、いうまでもなく、前期の学制期の読本、すなわち田中義廉の「小学読本」、稲垣千顥・那珂通高なか・榎原芳野さかきの「小学読本」が主たるものであったらうと考えられます。そして、その場合の教材は模型的文章による実科的内容の

もの、文語文による古今東西の逸話などでした。とすると、地理・歴史などの教科は独立していったにもかかわらず、読本の内容としては、やはり、それらの実科教材の初歩的なものを採りあげなければならなかったのです。

もちろん、それらはしだいに整ったものとなってきてはいます。また、互いに影響を与えあい、両傾向のものを統一しようとしているものも見られます。これらが、やがて次期の読本において統一されるのです。

### 〔中等科〕

中等科の「読方」について、小学校教則綱領は以下のとおり述べていました。

中等科ニ<sup>おい</sup>於テハ近易ノ漢文ノ読本、<sup>もし</sup>若クハ<sup>やや</sup>稍<sup>しょう</sup>高尚ノ仮名交り文ノ読本ヲ授ケ、……

ここに区別されているように、中等科の読本には、漢文のものと、かな交じり文のものとの2種あります。

- |                         |                          |    |          |
|-------------------------|--------------------------|----|----------|
| ◎木 沢 成 肅                | 「小学中等読本」                 | 6冊 | (明14)    |
| 平 井 正                   | 「新編小学読本」                 | 3冊 | (明16)    |
| ◎ <sup>かさ</sup> 笠 間 益 三 | 「小学中等科読本」                | 6冊 | (明16・17) |
| 羽 山 尚 徳                 | 「 <sup>中等</sup> 読本 小学文編」 | 3冊 | (明16)    |
| 内 田 嘉 一                 | 「小学読本中等科」                | 6冊 | (明17)    |
| ◎平 井 義 直                | 「小学 <sup>せん</sup> 新撰読本」  | 7冊 | (明17)    |
| 稲 垣 千 <sup>かい</sup> 顥   | 「読本中等科」                  | 6冊 | (明17)    |

当時の教科書には、ここにあげたものがあります。このうち、

◎印をつけてある木沢成肅「小学中等読本」、笠間益三「小学中等科読本」、平井義直「<sup>小学</sup><sub>中等</sub>新撰読本」が、いずれも、漢文のもの、かな交じり文のものが半分ずつとなっているもので、その他は、かな交じり文の教科書です。

ここに見られるかな交じり文とは、後に見る稲垣千穎の「読本中等科」を除いて、ほとんどすべて漢文を書き下しにしたもの、そうでなくても漢文調のものです。そして、その内容も、木沢成肅の「小学中等読本」では、

此編、<sup>この</sup>或ハ<sup>あるい</sup>孝悌<sup>てい</sup>、或ハ義戦、或ハ治績、或ハ詩歌、錯雑シテ<sup>これ</sup>之ヲ載ス。是レ生徒ヲシテ、意思轉換<sup>う</sup>倦マザラシム。

小学生徒読書ノ業ハ、<sup>わざ</sup>心思ヲ勞セズシテ<sup>おのずか</sup>自ラ得ルヲ宜トス。  
故ニ<sup>ゆえ</sup>此編、<sup>ま</sup>先ヅ<sup>わが</sup>我国古人ノ功績ヲ<sup>しる</sup>記シ、次ニ<sup>し</sup>支那<sup>な</sup>西洋ノ美蹟ヲ<sup>せき</sup>載ス。皆是レ心思ヲ<sup>よろこ</sup>怡バシ、及意義ノ解シ<sup>やす</sup>易キヲ<sup>もつぱら</sup>專トス。

ど述べているように、「継体帝ノ政治」、「安世（良峯）書を読ム」、「<sup>そうひん</sup>曹彬印ヲ取ル」、「<sup>きよう</sup>孔融ノ恭讓」（巻一）といった題材があげられています。外国人の事跡などもあげられていますが、主として「多ク勤王愛国ノ事蹟ヲ<sup>せき</sup>抄出ス」と凡例に述べているとおり、国粹的国家的傾向の強いものです。

もっとも、このような態度をとりながら、開化的傾向にも注意しているものもあります。羽山<sup>しやう</sup>尚徳「<sup>読本</sup>中等小学文編」は、「明徴録・近世<sup>そう</sup>叢語・大東世語・名賢言行略・近古史談」などから国史上の逸話、「<sup>りゆう</sup>劉氏人譜・<sup>けい</sup>稽古彙編・<sup>しよく</sup>入蜀記」などから中国の逸話を取り、それらが主体をなしているものですが、なおこのほか幕末



から明治にかけて洋学者たちに広く読まれた英人合信 Hobson の「博物新編」などからも文章をとっています。平井義直「<sup>小学</sup><sub>中等</sub>新撰読本」も同様です。「大東世語・近古史談・菜根譚・<sup>たん</sup>近世叢語・日本外史」からの文章が、主となっていますが、それ以外に、グードリッチの博物書の翻訳である「具氏博物学」、内田正雄の著わした地理書の「<sup>よ</sup>輿地誌略」、米人ウィリアム＝マルチン W. Martin の「格物入門」等からも題材を採っています。つまり、一方で伝統的教材が中心をなしているとともに、それとさしつかえのない範囲で、物理・化学・地理等の開明的教材も含んでいるのです。このような内容のものも含めて、当時のかな交じり文とは、主として漢文を読みくだした調子の文章であったわけです。

ここに「<sup>中等</sup><sub>読本</sub>小学文編」にあげられている「博物新編」中の文章を示しておきます。（これは魚の名についてですが、「電気」という訳語はこの書に用いられているため、一般にも用いられるようになったものです。それまでは、エレキテ（ト）ル・エレキテリシテート・エレキなどといわれていたものでした。）

### 電 気 魚

オースタリー  
澳太利洲＝電気魚有リ。形チ<sup>まんぜん</sup>鰻<sup>ごと</sup>鱈ノ如シ。人若シ手ヲ<sup>も</sup>以テ把<sup>は</sup>  
<sup>そ</sup>捉スレバ、魚怒テ<sup>いかり</sup>尾ヲ<sup>ふる</sup>振フ。即チ<sup>すなわ</sup>電気有テ<sup>あり</sup>発現シ、人ヲシテ遍  
体驚<sup>せん</sup>顫セシム。……

いろいろな書物から文章を採っていることは少なく、ほとんど編者によって書きおろされているところの内田嘉一「小学読本中等科」の文章にしても、上に見た教科書の文章と、それほど変わ

りはありません。漢文を読みくだした調子の文語文です。つまり、このような文章が当時模範とすべき普通の文章と考えられていることがわかります。

もっとも、これに対し、別の主張もあります。近世雅文の文章に範を置こうとしているもので、稲垣千顥<sup>かい</sup>「読本中等科」がそうです。

此の書、慶長元和より以来、近時に至るまでの諸名家の著作、及筆記書牘<sup>とく</sup>等、普通文の中に就<sup>つ</sup>きて今日に行ひて弊なく、以<sup>もつ</sup>て模範とするに足る可<sup>べ</sup>き者<sup>せん</sup>を撰<sup>せん</sup>択して、童蒙<sup>もう</sup>読方の科書の用に供す。

と、凡例に述べているとおり、採用しているすべては近世随筆・逸話の断片です。全6冊中、14回以上採られている作者は、以下のとおりです。（数字は回数を示します。）

貝原益軒 77	湯浅常山 19	伊勢貞丈 15
貝原好古 12	室鳩巢 <sup>きゅう</sup> 11	新井白石 11
宮崎安貞 10	伊藤東涯 <sup>がい</sup> 8	本居宣長 8
太田元貞 6	太宰春台 6	三熊思孝 4
南川維遷 4	山崎美成 4	

内容からいえば、その範囲は広く、実科的様相を多分に示すとともに、伝統的傾向の強いものです。一、二の例をあげると、

墨 土 大和本草 貝原篤信<sup>あつ</sup>

山州山科<sup>しな</sup>ノ東。牛ノ尾山観音堂ノ後ニ黒キ土アリ。青色ヲオブ。粘クシテ細カシ。筆ニ浸シテ字ヲ書クベシ。僧コレヲ用ヒ

テ仏経ヲ写ス。<sup>にかわ</sup>膠ヲ用ヒズシテ清潔ナル<sup>ゆえ</sup>故ナリ。本草石炭ノ集  
解ニ石墨アリ。此ノ物<sup>こ</sup>是<sup>こ</sup>レ石墨ノ類カ。古ハ墨ナシ。土ヲ用ヒ  
テ書ストイフ。カヤウノ土ヲ用ヒタルナルベシ。(卷二)

伊藤仁斎ノ度量      閑散余録      南 川 維 遷

仁斎存生ノ時。土佐侯ノ儒官大高清介トイヘル人アリ。適從  
録ヲ著シテ大ニ仁斎ヲ<sup>ひき</sup>誹譏セリ。一門人彼ノ書ヲ持来テ示シ。  
<sup>かつ</sup>且コレガ<sup>ばく</sup>弁駁ヲ作ランコトヲ勸ム。仁斎微笑シテ言ナシ。門人  
怒リフツクミテ曰。「<sup>いわく</sup>モシ先生弁ゼズンバ。<sup>われそ</sup>吾其ノ任ニ当ラン」  
ト。仁斎<sup>おもむろ</sup>徐ニ言テ曰。「我非ニ彼是ナラバ。ワガ非ヲ改メテ彼  
ガ是ニ從フベン。モシ我是ニ彼非ナラバ。我ガ是ハ<sup>すなわち</sup>即天下ノ  
公共也。<sup>なり</sup>固ヨリ<sup>もと</sup>弁ヲ<sup>ま</sup>須タズ。久シクシテ彼モ亦<sup>みずから</sup>自其ノ非ヲ知  
ラン。<sup>なんじただ</sup>汝只自修メヨ。他ヲ<sup>なか</sup>省ルコト勿レ」ト。仁斎ノ度量大旨  
此ノ類ナリ。「此ノ事ハ。香川太沖ガ<sup>ばつ</sup>薬選ノ<sup>しか</sup>跋ニ見エタリ。然レ  
ドモ其ノ書。医生ノ外ハ。人毎ニ<sup>こと</sup>読マザルヲ<sup>もつ</sup>以テ。此ニ<sup>ぜい</sup>贅ス。」  
(卷五)

のような文章です。この外、「真字を書く法(童子訓)」「近世物  
産学ヲ唱ヘシ人ノ事(閑散余録)」「富士谷成章の略伝(名家略伝)」  
といったように、「<sup>しょう</sup>高尚ノ仮名交リ文」の範囲は広いものです。

なお、この書の教材提出の方法には特色があります。大段落・  
小段落などを示し、会話や引用文はかぎ(「」)をつけて示して  
いることです。後に中学の教科書のところで見ますが、同じ彼の  
著書「本朝文範」や「和文読本」などでも、この方法はやはり採  
られているところですよ。明治 20 年代にはいって、ようやくこの

方法は否定されますが、約 10 年ぐらゐの間は、古典提出にあたって、こういう方法が採られていたのです。（最近の教科書では、古典提出にあたって、ふたたびこういう方法が採られてきています。）

### 〔高等科〕

高等科の「読方」は、以下のように規定されていました。

高等科ニ至テハ漢文ノ読本、若クハ高尚ノもし仮名交リ文ノ読本ヲ授クベシ。

当時の読本には、

稲垣千かい願 「和 文 読 本」 4 冊 （明 15）

羽山尚しょう徳 「高等読本 小 学 文 編」 3 冊 （明 16）

内田 嘉 一 「増訂 小学読本 高等科」 6 冊 （明 17）

文 部 省 「小学読本 高等科之部」 2 冊 （明 17）

などがあります。だいたい、中等科のものと同一傾向が見られます。

まず、稲垣千かい願「和文読本」は平安朝から室町末までの和文を部類別にあげているもので、伝統的傾向を示しているものです。しかし、この書は当時中学校でも使用されたので（中等科を終えて中学へ進むことになっていました）、中学校のところで触れることにします。

すべて漢文でしるされているのは、文部省「小学読本高等科之部」です。わが国・中国・西洋の逸話が主としてあげられていますが、「蒸気機関」についての説明など、中等科の読本で見たよ

うに、洋学関係の書籍（漢文でしるされている）から採ったものも見られます。

かな交じり文でしるしているのは、内田嘉一「<sup>増訂</sup>小学読本高等科」です。これは同じ著者の中等科の読本に続くものであり、それと同じく古典的教材に合わせて、地理・理科などの開明的実科教材もとりあげています。「古典主義と開化主義との折衷を目ざして」（井上<sup>たけし</sup>赴氏「小学読本編纂<sup>さん</sup>史」） いるものです。

高等科の読本は、だいたい以上のとおりです。中等科で見てきたところと、あまり変わりはありません。同じ傾向で、むずかしくなっているというぐらいの違いです。

では、中等科・高等科の読本を合わせて、そこにはどんな特色が見られるでしょうか。まず、文章からいいますと、漢文を読みくだした調子の文章が主流をなしているということです。次に、内容の上からいいますと、和漢の故事・逸話などが採用され、国粹的伝統的傾向が強くなっているということです。

漢文調の文章が主流をなしていることは、一つには当時の学問教養としては、漢文を修めることがまず必要であったという点に基づいています。後に見る当時の回想録によっても、当時漢文がどれほど熱心に学習されていたかをうかがうことができます。また、もう一つには、この期になって漢学がふたたび顧みられ、徳育的伝統的風潮がしだいに盛んになってきたこともあります。学制期では、漢字・漢文はあれほど排斥されたのですが、けっきょく長い間親しんできた漢文を捨て去るということはできなかった

のでした。ここに示されているような漢文体の文章は、やがて日用の普通文としての位置を占めることになります。

次に、徳育的伝統的傾向の内容が多くなっていることは、やはり、この期の風潮と関係しているものです。すでに「教学大旨」において、「専<sup>もつぱ</sup>ラ仁義忠孝ヲ明カニシ、道德ノ学ハ孔子ヲ主トシテ」と述べられていたところに応じます。

木沢成肅の「小学中等読本」は凡例で、「<sup>わが</sup>我国、君臣ノ大義名分ヲ重ンズルハ、国体ノ<sup>しか</sup>然ラシムル<sup>ゆえん</sup>所以ナリ、故ニ<sup>ゆえ</sup>此書、多ク勤王愛国ノ事蹟<sup>せき</sup>ヲ抄ス」と述べ、笠間益三の「小学中等科読本」はその例言で、「其ノ<sup>そ</sup>記ハ和漢聖賢哲士ノ勸学・修身・齐家・尊王・愛国等ノ言論偉績ヲ<sup>もつ</sup>以テス」と述べていました。その意味から、和漢の故事・逸話などが多くとられていたのでした。もっとも、そうはいっても、開明的傾向のものが全く姿を消したわけではありません、ある範囲の中でそれらは採用されていたのでした。次期において、それらの内容が、やがて総合される動きを感じ取ることができます。

### 〔回想録から〕

当時の実際の状態について見てみましょう。ちょうど学制の制度が改められたときに、下等小学を終えて中等科へ移った<sup>あし</sup>芦田恵<sup>のすけ</sup>之助は、当時のことを以下のとおり回想しています。筆者は、後には東京高等師範学校附属小学校訓導として、つづり方教育において「随意選題」をとなえて新生面を開き、そのほか、国定読本、朝鮮の小学読本の編集にも関係し、後半生は全国に教壇あんぎゃ

をこころみて、国語教育に一生をささげた人です。学校は、兵庫県氷上郡下竹田村明新小学校です。

下等全科卒業の時は、山高帽子を郡役所から下さいました。四十余年以前（この稿を執筆した大正 14 年から数えて）に、<sup>わらぞうり</sup>藁草履をはいて、山高帽子を<sup>かぶ</sup>被った丹波の寒村の児童は全く奇でした。和服着で<sup>ぐつ</sup>洋靴をはいた位の比ではありませんでした。それが大なる名誉であり、父兄・師弟のすべてが真剣でしたから、一種の喜劇でした。

私が上等八級になる時、学制がかはつて初等・中等・高等となりました。中等科では漢史一班といふ支那歴史の仮名交り文を読み、高等科では十八史略七冊を二年間に学びました。私が高等科を卒業した年、尋常四年と高等科四年にわかれしました。

ここに述べられているところから見ても、当時中等科以上では漢文が主体であったことがわかります。

また、これはこの期の終わりに次期の初めごろの例になりますが、東京下谷の本島小学校へ通学していた石井<sup>はくてい</sup>柏亭（画家）の回想を見ましょう。かれは「柏亭自伝」の中で、次のとおり述べています。

読み方の方は先づ生徒心得と云ふものを読まされたが、今日から見れば順序の立たないこと驚くべきものだ。子供はたゞ先生の教へる通りに音読して行くだけである。それから読本としては、「第一地球上ノ人種ハ五ツニ分レタリ、<sup>あ</sup>亜細<sup>あ</sup>亜人種、<sup>う</sup>欧<sup>ろつば</sup>羅巴人種……」を以て<sup>もつ</sup>始まる処の、西洋のリーダーを直訳した

様なもので、用語の難易など御構ひなしのものであつた。これ  
もたゞ無茶苦茶に音読を続けて行つた。浅井忠が挿<sup>さし</sup>絵を描い  
た、生紙<sup>き がみ</sup>へ刷られた文部省蔵版の<sup>やや</sup>稍順序立つた尋常小学読本が  
小学校で用ひられる様になつたのは、多分明治二十一年若しく  
は二十二年位であつたらう。だから私は其<sup>その</sup>第一卷「ハ、ハト」と  
云ふのは使はず、其二、三卷から使つたのである。併<sup>しか</sup>し其二、  
三卷にしても、前の「地球上ノ人種」に比べると却<sup>かえつ</sup>てやさしい  
位であつた。

これによると、この期においても、前の学制期の田中<sup>よしかど</sup>義廉「小  
学読本」がまだ使われていたことがわかります。そうして、その  
進み方も、ただ音読をずっと続けていくやり方であつたようです。  
なお、これにつけ加えますと、やはり前の学制期の稲垣<sup>かい</sup>千<sup>せん</sup>額「小  
学読本」も、この期の徳育的風潮に応じるものとして、多く採用さ  
れていたといわれています。

## (2) 作 文

前の学制期では、往来物系統のもの、記事文・論説文を中心と  
する漢文を中心とする漢文系統のもの、単語を使用して文章を作  
るもの、の3種<sup>3</sup>のものが見られました。この期においては、単語  
を使用して文章を作るというその第3の形式のものがまず最初に  
実施され、ついで口上書類・日用書類などの往来物流のほうへ進  
むものと、さらにそれを通して記事文・論説文などの漢文系統の  
ほうへ進むものと、段階的に定まってきました。前の期の3種の



系統のものに、ようやく順序がつけられ、それぞれの分担するところが明らかになってきたといえます。そして、さらに漢文系統のものへ進むのは、もっと上級の学校へ進もうとしている人たちにとって必要なものとなってきたのです。

### 〔初 等 科〕

小学校教則綱領は、初等科の作文について、以下のとおり言っています。

初等科ノ作文ハ近易ノ庶物ニ就<sup>つい</sup>テ、其<sup>その</sup>性質等ヲ解セシメ、之ヲ題トシ、仮名ニテ単語・短句等ヲ綴<sup>つづ</sup>ラシムルヲ初<sup>やや</sup>トシ、稍進テハ近易ノ漢字ヲ交ヘ、次ニ簡短ノ仮名交リ文ヲ作<sup>かね</sup>ラシメ、兼テ口上書類ヨリ日用書類ニ及ブベシ。

初等科の作文は、ここに述べられているように、かなの単語・短句から始まり、簡単なかな交じり文、口上・日用書類に及ぶことに整理されています。

- |         |   |                          |        |        |
|---------|---|--------------------------|--------|--------|
| 田 中     | 鼎 <sup>かなえ</sup>                        | 「小学作文的例」                 | 5 卷    | (明 13) |
| 三 島     | 豊三郎 <sup>とよ</sup>                       | 「小学 <sup>読本</sup> 近 体 文」 | 1 卷    | (明 13) |
| 文 学 社   |   | 「小学作文全書」                 | 16 卷   | (明 16) |
| 稲 垣 千 颯 | 「新 <sup>かい</sup> 撰 <sup>せん</sup> 小学作文書」 | 3 卷                      | (明 16) |        |

これらがこの期の作文の教科書です。文学社「小学作文全書」は、巻一はかなの単語・短句、巻二は「たかき山・ふかき川」のようにかなに漢字を交えた短句、巻三・巻四はかな交じり文、巻五の上がかな交じり文、下は日用書類、巻六の上はかな交じり文、下は日用書類、巻七以下はすべて上が記事文、下が日用書類とな

っています。小学校教則綱領には付表があり、各学年で実施する細目の一例が示されていますが、この書の各巻の構成は、ほぼそれに従っているものです。

稲垣千穎「<sup>新撰</sup>小学作文書」は初等科用のものですが、この構成も同様です。巻一はいろは順・五十音順に2字または3字のかなの単語をあげ、ついで短句・短文に進むようになっています。巻二の前半はかな交じり文、後半は日用書類、巻三は書簡文をあげているものです。

これに対して、三島豊三郎「<sup>小学</sup>近体文」は、主として記事文・論説文の例を示しているものです。初めに、

○親ヲ敬ヒ、子ヲ慈ム<sup>いづくし</sup> ○身ヲ立テ、道ヲ行フ ○夙ニ起キ、  
夜ニ寝ヌ<sup>い</sup>

などの短文、格言などをあげた後に、

## 学 校

勇者モ奪フベカラズ、富者モ買フベカラザルハ<sup>ち</sup>智識ナリ。智識ハ、教育ニ由リテ達シ、教育ハ学校ニ<sup>おい</sup>於テ成ル。学校ノ教、  
<sup>あにゆるがせ</sup>豈忽ニスベケンヤ。

のような例文が、いろいろな題のもとにあげられています。これらの文章は、ほとんど漢文調のもので、次に見る記事文・論説文の教科書と同じ類のものです。

## 〔中等科・高等科〕

中等科・高等科の作文について、小学校教則綱領は、次のとおり定めていました。

中等科及高等科ニ於テハ、日用書類ヲ作ラシムルノ外、既ニ  
学習セン所ノ事実ニ就テ、志伝等ヲ作ラシムベシ。

上に見た文学社「小学作文全書」のあとの部分は、これに応じ  
て作られている作文の教科書です。

しかし、特に中等科・高等科において目につくことは、記事文  
・論説文の範文を集めている教科書が、この期にたくさん出され  
ていることです。前期の終わりごろ、すでにその傾向は見られま  
したが、特にこの期になって、漢学が重んじられ、漢文調の文章  
が主流をなすに至って、その傾向は著しいものとなったのです。

それらの教科書は、

久保田 <sup>りょう</sup> 梁山	「 <small>小学</small> 作文紀事論説五百題」	2 卷	(明 14)
大槻 <sup>つき</sup> 収蔵	「紀事論説文例」	2 卷	(明 14)
今井 <sup>きょうし</sup> 匡之	「 <small>高等</small> 論説記事簡牘文例」	2 卷	(明 14)
河崎与十	「 <small>小学</small> 作文記事論説文範」	2 卷	(明 16)
大久保 <sup>しゅう</sup> 桜洲	「 <small>和漢</small> 対照記事論説軌範」	2 卷	(明 18)

などです。これらはいずれも、各部門に分け、範文をあげ、その  
上欄には語義・類語などをかかげているものです。一、二の例文  
をあげてみます。

### 人日開筵ノ記

新年ノ宴会ヲ畢<sup>おわ</sup>リテ後二日、之ヲ人日ト為ス。此ノ日ヤ家々  
必ズ客ヲ会シ筵ヲ開<sup>もつ</sup>キテ、以テ祝賀ヲ唱フ。余モ亦俗ニ從ヒテ  
同窓ヲ会セリ。会スル者数輩、各自ニ太白ヲ浮<sup>うか</sup>べ、詩ヲ吟ズル  
者アリ、歌ヲ詠ズル者アリ、頽然トシテ玉山ノ将ニ倒レントス

ル者アリ。其ノ景況真ニ人日ノ名ニ負カズト云フベシ。是レ亦歳華ノ事ト云フベシ。因テ之ガ記ヲ作ル。(「小学<sup>い</sup>紀事論説五百<sup>こ</sup>題<sup>い</sup>」)

友ヲ邀<sup>むかえ</sup>テ花ヲ賞スル<sup>とく</sup>牘

客歳移ス所ノ桜花、宿雨ノ晴ル、ニ乗ジ、朶々全ク開キ、月下ニ之ヲ見レバ、実ニ春雲カト疑ハレ、暁ニ之ヲ望メバ烟霞ノ如シ。其景情人ヲシテ身ヲ塵外ニ置シム。是レ兄ガ周旋ノ然ラシムル所ニ係レリ。兄ニ一觀セシメザレバ、生ノ義務ヲ欠ニ似タリ。乞一宿ヲ期シテ来觀センヲ。頓首。(「紀事論説文例」)

讀ニ華盛頓<sup>ワ シン トン</sup> 伝一

英国政府米国人民ヲ御スル事<sup>りよう</sup>压制<sup>きわ</sup>凌虐ヲ極ム。米民生ヲ聊ンゼズ。怨嗟ノ声紛々タリ。是時ニ当<sup>あた</sup>リ、華盛頓悲憤慷慨<sup>こうがい</sup>、首トシテ義ヲ唱へ、有志ノ士民雲集響應<sup>ついで</sup>、遂ニ華氏ヲ推シテ大将トナシ、耒耜<sup>らいし</sup>庶旗ヲ執<sup>とり</sup>テ彼ノ堅甲利兵ニ抗敵シ、雪霜ニ指ヲ脱シ、矢石ニ手足ヲ貫カレ、奮戦勇闘死ヲ視ル<sup>み</sup>帰スル如ク、梳風沐雨七星霜ヲ経テ、始<sup>はじめ</sup>テ虎豹ノ英兵ヲ走ラシ、万死ヲ出<sup>いで</sup>テ一生ヲ得、遂ニ振古未曾有ノ一大楽国ヲ開ケリ。烏呼何ゾ勲績ノ偉大ナルヤ。(「高等<sup>とく</sup>論<sup>ろん</sup>記事簡牘<sup>かん</sup>文例」)

このように、漢文調の文章が示されているわけです。特に、大久保桜洲<sup>しゅう</sup>「和漢<sup>わ かん</sup>対照<sup>たい しょう</sup>記事論説軌範」は、和漢の文章を「記・論・伝・序……」といった部類順にかかげ、上欄には漢文の原文を示してあるものです。漢作文を意図しているもので、けっきょくはこういふところまで進むのを目標にしていたと思われます。(後に見

る大阪中学校の教則でも、上級になると、やはり漢作文の時間は設けられています。)

### 〔当時の回想と生徒の作文〕

この期の作文は以上のようなものでした。それでは、実際の作文の授業はどのように行なわれていたのでしょうか。当時の人たちの述べるところを見ましょう。

少し前の例になるのですが、東京柳原の育英小学校へ明治7年(1874)から通学した、後の評論家内田魯庵<sup>ろあん</sup>は、当時の作文の授業について、次のように述べています。

此の先生(修身を担当していた先生)が作文を受持たれたが、先生の教授法は山陽や咄<sup>とつ</sup>(拙?)堂や宕陰<sup>とう</sup>や息軒の文章をボードへ書いて生徒に写し取らせ、一々文句の講釈をして暗誦<sup>いよう</sup>させた。先生は作るよりは読めと教へ、山陽が史記の項羽本紀を何十遍とか何百遍とか暗誦した咄<sup>はなし</sup>なぞをして聴かして課題よりは古今の名文の暗誦を先きにした。私が漢文に興味を持初めた<sup>そもそ</sup>抑もは、此の先生から江戸末期の名家の漢文の講釈を聴かされてからであつた。

其頃<sup>そのころ</sup>顯才新誌が初めて発行されたが、運動競技も唱歌も教へられなかつた当時の小学校生徒の他流仕合をするのは此の顯才新誌は全国(主に東京)小学校の児童の晴れの場所だつた。看板となつたのは第一頁<sup>ページ</sup>の書画欄で、殆んど跡見学校が独占して三条公の令嬢(後の閑院宮妃殿下)を初め名流貴紳の満六歳乃至満八歳といふ幼い令嬢の、花蹊女史<sup>けい</sup>(跡見学園の創設者跡見花

際) ソツクリ其まゝの筆蹟や画が毎号を賑はした。<sup>にぎわ</sup>最初の二三年間の同誌を今見ると極めて興味が深い。今日名を成す名士や貴夫人の文章や筆蹟が満何歳と、多くも十二三歳を越えない年齢と在籍校名を明記して登載されてをる。私は此の顥才新誌に名の載るのが羨ましくて、学校で高点を取つた作文があると顥才新誌へ寄書してもイ、乎<sup>か</sup>と度々先生に許しを乞つたが、児供<sup>こども</sup>の時から名を出すのは害があると云つて許さなかつた。(実をいふと私のクラスには文章の上手なものはゐなかつたので私は割合に高点を得たが、顥才新誌に載る世間の児供の文章と比べると<sup>とて</sup>逆も比べものにならぬマヅサであつたから先生は没書の不面目を懸念されたのだとは後に<sup>わか</sup>解つた。)

作文の授業にあたつて、頼山陽・齋藤拙堂<sup>せつどう</sup>・塩谷宕陰<sup>とういん</sup>などの幕末の漢学者の文章を暗記し、模範としたことがしるされています。なお、当時少年雑誌に作文が掲載され、それに投稿する者が多かったこともわかります。(顥才新誌の書などは、どうも代作が多かつたらしいと、木村小舟は「少年文学史」で述べています。)

当時の少年雑誌で、生徒の作文書画を載せていたおもなものには、「学庭拾芳録(明8?~明11)」・「顥才新誌(明10~明21?)」・「小学教文雑誌(明12~明21?)」などがありました。だいたい明治10年(1877)前後に創刊されたものが多く、当時の小学生・中学生が愛読したものでした。後に中学のところで見る芳賀矢一博士の回想においても、これらの少年雑誌について述べられています。ここに木村小舟の「少年文学史」に載せられている当時

の作文の一例をあげてみます。「小学教文雑誌・第18号」に載せられたもので、作者は橋本勝太郎（満10才）、後に陸軍中將になった人です。

#### 友人ノ東京ニ遊ブヲ送ル序

人誰レカ生レナガラニシテ知ル者アラシヤ。人ニ賢愚ノ別アル、天ノ之<sup>これ</sup>ニ賦スル、豈<sup>あに</sup>賢愚ノ別ヲ以テセンヤ。各自<sup>てんびん</sup>天稟ノ性ヲ養フト養ハザルトニアリ。古語ニ曰ク、璞<sup>たま</sup>磨カザレバ光リナシト。人モ亦然<sup>またしか</sup>リ。而<sup>しか</sup>シテ人苟<sup>いやし</sup>クモ知識ヲ磨<sup>みが</sup>カンコトヲ欲スルモノハ（欲セバトナスベキカ）学バザル可カラズ。学バンコトヲ欲スル者ハ、良師ニ就カザル可カラズ。然<sup>いえど</sup>リト雖モ我郷ノ如<sup>ごと</sup>キハ（我ハ吾ナルベキカ）僻陋<sup>へきすう</sup>ノ地ニシテ、良師ノ就ク可キナキヲ如何セン。君一朝志ヲ立テ将ニ東京ニ遊バントス（君ノ上ニ故<sup>こ</sup>ニノ字アルベキカ）。君後來ノ成業期スベシ。抑<sup>そもそ</sup>モ予ノ君ニ於<sup>お</sup>ケル互ニ相其知ラザル所ヲ聞キ（聞ハ聴ナルカ）、互ニ相其足ラザル所ヲ補ヒ、辛酸<sup>な</sup>ヲ嘗メ、艱難<sup>かん</sup>ヲ凌ギ、学ニ従事スル茲<sup>ここ</sup>ニ年アリ。今ヤ別ニ臨テ唯<sup>もうも</sup>ダ惘々トシテ別ヲ惜ムノ情切ナル而<sup>の</sup>已。望ムラクハ君将来<sup>し</sup>孜々<sup>きつ</sup>屹々トシテ愈其身ヲ修メ、愈其業ヲ修メ<sup>いよいよ</sup>ンコトヲ、夫レ人情ハ遊蕩<sup>とう</sup>ニ流レ易シ。一朝方針ヲ誤リ、花ニ溺<sup>こつえん</sup>レ月ニ迷ヒ、吾言ニ於テ忽焉トシテ省ミズ、以テ相望ム所ヲ失スルガ如キハ、則チ君将タ何ノ面アツテ再ビ相見シヤ。然<sup>いえど</sup>リト雖モ知ル、君ノ心志鞏固<sup>きようこ</sup>ニシテ（知ルノ上ニ予ノ字アリタシ）敢<sup>あえ</sup>テ外物ノ為ニ奪ハレザルヲ。此言ヲ為スモノハ特ニ相思フノ篤<sup>あつ</sup>キニ出ル而已。勉メヨ哉。其行クニ於テヤ、序シテ以テ

別ヲ送ル（此言ヲ云々ノ上ニ而シテノ三字アリタシ）。

なお、もう一つ当時の作文について回顧している文章をあげておきます。今度は、この期より少し後のことになるのですが、前にも見た石井柏亭<sup>はくてい</sup>のものです。あまりよい例とはいえないかもしれませんが、文範中の語句（多く上欄に、いろいろあげられています）などを意味も知らずに使っていた一例です。「花見」といえば、「一瓢<sup>びょう</sup>をたずさえて墨堤に遊ぶ」といったふうの文章が、酒とはなんの関係もない少年によって書かれていたと、よくいわれます。前にあげた範文の中にも、「太白ヲ浮<sup>うか</sup>べ」などという句がありました。こういう語句を、意味もわからずつなぎ合わせて作文していたのです。ここにあげるのもそれに似た例です。

「友の遊惰<sup>いさ</sup>を諫<sup>いさ</sup>むる文」と云ふやうな作文の課題が出た時、私が家<sup>うち</sup>にあつた或文範中の問題を想ひ出して訳も分らずに、「花街<sup>しやう</sup>の娼婦は三寸の舌頭を以て……」と真似して書いたのも、M先生の笑ふ<sup>ところ</sup>処となつた。「花街の娼婦」を指して「これは何だね」と訊<sup>き</sup>かれた私は、もともと其意味を知らなかつたのだから、全く答へに窮した。併し兎<sup>しか</sup>に角<sup>と</sup>作文<sup>かく</sup>の方では前田（明治の文人前田夏繁）の息子の夏野や私などが出来る方であつたらう。

### （3） 習 字

習字は、寺子屋での「手習」を受けついでいるものです。もともと「手習」の中には「読むこと」も一部はいていたのですが、その中から「読むこと」は「読方」として分化独立していき



ました。同じく、「文を作ること」も「作文」として独立していききました。こうして、「字を書くこと」だけが「習字」として残ったのです。

小学校教則綱領は、習字について以下のとおり規定しています。

初等科ノ習字ハ、平仮名、片仮名ヨリ始メ、行書、草書ヲ習ハシメ、其手本ハ数字、十干、十二支、<sup>その</sup>苗字、著名ノ地名、日用庶物ノ名称、口上書類、日用書類等、民間日用ノ文字ヲ以テ之ニ充ツベシ。

中等科及高等科ニ至テハ行書、草書ノ外、<sup>かい</sup>楷書ヲ習ハシムベシ。

ここに述べられている「数字・十干・十二支・苗字……」は、寺子屋で学習されていたものです。小学校教則綱領は、これらをまとめて順序づけたものといえます。

なお、小学校教則綱領には、各内容をどの学年で実施するかの一例を示した付表があります。それをまとめて示しますと、以下のとおりです。

#### 初 等 科

1・前 平がな・かたかな  
後 行書・数字・十干・十二支

2・前 行書・前期の続き  
・地名・日用庶物の名称

2・後 行書・草書・前期の続き・口上書類

3・前 行書・草書・日用書類

後 行書・草書・前期の続き

#### 中 等 科

4・前 行書・草書・前期  
の続き

後 ”

5・前 行書・草書・前期  
の続き、楷書・千  
字文

5・後 行書・草書 <sup>かい</sup>楷書  
前期の続き

6・前 楷書 前期の続き

後 ”

## 高等科

7・前 楷書・行書・草書

後 前期の続き

8・前 前期の続き

後 ”

すなわち、「数字・十干・十二支」から始まって「日用庶物の名称」などは、だいたい2年の前期までに終わることになっています。2年後期に口上書類、3年前期から日用書類の習字が実施されます。まず行書が行なわれ、ついで2年後期から草書、中等科の2年前期から楷書が、それぞれ加えられます。

以上の点からいいますと、前期の方式のうち、改められているのは行書・草書で、これが初めに実施されるようになっていきます。前期の小学教則では、楷書から始められることになっていたのですが、それが改められたものです。

この楷書から始めることについては、前に学制期のころで見たとおり、文部省の西村茂樹・九鬼隆一の巡視記録で、

習字ハ先ヅ行書ヲ教ヘ、次ニ草書ヲ教ヘ、最後ニ<sup>かい</sup>楷書ヲ教フベシ。<sup>あるい</sup>或ハ楷書ヲ廃スルモ可ナルベシ。（西村茂樹）

<sup>かい</sup>楷書ハ字画ノ<sup>もつとも</sup>最正シキ者ナレバ、唯ニ習字中ノ至要タルノミナラズ、<sup>また</sup>又読書ヲモ助クベキ者ナリト雖、<sup>いえども</sup>平常人民ノ住所、姓

名、手簿、日用親族往復ノ手簡等ヲ以テ足レリトスル者ハ、未  
ダコレヲ学ブノ緊要タルヲ見ズ。（九鬼隆一）

と批判されていたところでした。日常の用という点から、楷書よりも行書・草書が必要であると述べられていたのです。このような当時の実情が考慮されて、ここに見る改正となったものでしょう。（しかし、当時の読本は楷書でしるされているものがかなりあります。そのほか、印刷物の増加などで、しだいに楷書のほうが人々に親しいものとなってきます。ただ、当時としては、急激に楷書に改めるということができなかったから、行・草書のほうへかえたのでしょう。）

ところで、以上のとおり、「習字」科は寺子屋以来の内容を受けついでいるものですから、この科の教科書は各地方においても多く作られています。

浪 <sup>なに</sup> 華 <sup>わ</sup> 文 <sup>ぶん</sup> 会 <sup>かい</sup>	「小学習字本」	(明15)
平 <sup>へい</sup> 井 <sup>い</sup> 義 <sup>よし</sup> 直 <sup>なお</sup>	「改正 新刻習字本」	(明15)
千葉師範 <sup>しはん</sup> 附小	「小学習字帖」	(明15)
宮城師範学校	「小学習字 <sup>ちよう</sup> 帖」	(明15)
久保田 <sup>りよう</sup> 梁山	「雅 <sup>や</sup> 俗 <sup>よく</sup> 開化小学用文」	(明16)
静岡県学務課	「初等小学習字帖」	(明16)
三重県学務課	「小学習字帖」	(明16)

これらが、当時出された習字の教科書です。各府県の学務課や師範学校で編集されているものがかなりあります。

ただ、久保田梁山「雅俗開化小学用文」は、小学生だけでなく、

一般の人にも手紙の書き方を示しているものです。この期には、  
 こういう類のものもかなり出ています。（そして、特に一般の  
 女子用のものが後々まで残ります。）次にその一例をあげておきま  
 す。文章自体は作文の教科書などにあげられているものと大した  
 違いはないのですが、ただ書体や字の大きさが違います。かなり  
 大きい字で、敷き写しできるぐらいになっています。

### 観花誘引之文

春暖之氣相催候処、益御清勝<sup>せん いたり のぶれば</sup>欣羨之至。陳者、即今東台墨陀  
 の桜花<sup>ぞくし</sup>属<sup>に</sup>満開<sup>いたすらに</sup>候由、徒致<sup>するは</sup>坐開<sup>するは</sup>消<sup>するは</sup>日月<sup>するは</sup>無風流之事故、盟  
 台事務之閑劇を伺ひ、東台墨水之堤花<sup>いたるまで</sup>に至迄勝地<sup>たく</sup>を探遊致度、  
 就ては御同心被<sup>まじく</sup>下候間敷哉。難<sup>がたく</sup>計<sup>がたく</sup>尊用<sup>がたく</sup>故に未<sup>がたく</sup>刻<sup>がたく</sup>日限<sup>がたく</sup>。  
 因<sup>よつ</sup>て以<sup>もつて</sup>小倅<sup>ひょうをまち</sup>俟<sup>ひょうをまち</sup>報命<sup>ひょうをまち</sup>候也。勿々不次<sup>そうそう</sup>。

しかし、習字の教科書に見られることは、上に見たとおり、地

方出版の習字教科書が、前の期と同じく多いということです。仲新氏は「近代教科書の成立」の中で、教科書全体に対する地方出版のものの割合を算出されています。その中から、言語・文字の教育に関するものを引用しますと、左の表のとおりです。読本のよう  
 に新しい形式のものは、いちど模範と

種別 年次	読本	作文	習字
明治 1—3	—	—	—
4—6	0	33	73
7—9	50	55	77
10—12	71	55	53
13—15	33	57	68
16—18	34	74	80
計	39	59	70

なるものが中央で出版されないと出されないことは、10年～12年の71%、13年～15年の31%という比率の比較からも、うかがうこ

とができますが、これに比べて、習字のほうはそれほどの変化はありません。仲新氏は、その理由について、

習字はすべての小学校において行はれたものであり、江戸時代以来の往来物の伝統最も強く、また地方で著作出版することが比較的容易であるといふが如き理由によるものと考へられる。

と述べておられます。

### 〔回想録から〕

習字については、以上見てきたとおりです。ここで、また「読方」「作文」の場合と同じく、当時の実情について見ることにしましょう。次期の初めごろのことになりますが、前に読本や作文のところでも見てきた「柏亭自伝」の例です。東京下谷の本島小学校へ通学していた石井柏亭は、同校での習字の授業について、以下のように述べています。

尋常一二年の私達は毎日墨の香の満ちた室に居て、可なり長い時間を習字に費したと覚えて居る。墨の香即ち膠<sup>すなわ</sup>の臭<sup>にかわ</sup>である。習字は無論半紙を綴<sup>と</sup>ぢた双紙へするのである。双紙が真黒になると淡墨でも書けるので、私達は双紙の早く黒くなることを望んで居た。墨を磨<sup>す</sup>るのが大儀なので成る可<sup>べ</sup>くあまり磨らない算段をするのであつたが、水に近い淡墨で手習ひしては手が上らないなどとも云はれたものである。今考へて面白かつたと思ふのは、其頃習字の時間によく上級の女達が助手のやうになつて私達の坐<sup>すわ</sup>つて居る後に立ち、私達の背にのしかかる様にして

其手に私達の筆持つ手を握つて教へて呉れたことである。其場合私達の鼻を撲つものは墨の香に交る少女の髪油の匂ひであつた。

寺子屋時代には、上級の者が下級の者に教えるということがありました。「手習」だけでなく、どの学科においてもそうでした。しかし、そういう方法は学制以後改められました。ただ、この記載から見ますと、習字にだけは、そうした方法がまだ残っていたもののようです。